

“学校レクリエーション”は子どもたちに何をもちたらすことになるのか  
—コミュニケーション能力の変容に着目して—

○谷口勇一 [大分大学]

キーワード: “学校レクリエーション” コミュニケーション能力 子ども

## 1. はじめに

2011年2月19～20日にかけて開催された九州レジャー・レクリエーション学会平成22年度大会において、「子どもの発育・発達とレクリエーションの役割—“学校レクリエーション”の普及展開を視野に入れて」が検討された<sup>註1)</sup>。

当該大会において実施されたシンポジウムでは、概ね以下のような議論が展開されている。まず、幼児心理学の立場から安原氏は、幼児期のあそびと親支援について「幼児期におけるあそびの持つ意味はその後の発育発達と密接な関係性を有している。その際、幼児(子ども)は親と対峙する中で“あそびによる社会化”がなされることとなる。一方で、遊ばせ方もしくは遊び方自体を知らない親(大人)存在の増加傾向が看取されており、幼児期を含めた各種教育場面における“あそび学習”機会の創造が重要な視点となっている」と論じた。同様の発言は、幼児体育の専門家である瀧氏からもなされ、「幼児から小学校低学年期の子どもは、身体活動を伴う遊びの量に比例して、学習意欲を高める可能性を有している。遊びには、人との関係性を理解する要素、すなわち、相手の話している内容を理解し、行動せねばならない一種の規範性の理解が促される。また、競争を伴う遊びの場合、自らの中での試行錯誤が生じることとなる。遊びの機会が減少している今日の子どもの社会は、まさにコミュニケーションをはじめとした学習機会の減少を招きかねない」と述べられた。

子どもを取りまく各種能力(体力、学力、コミュニケーション能力)の低下が社会的な問題とみなされ始めて久しい。上述した2名のシンポジストの見解はおおいに首肯されるものであり、今日の教育活動における子どもの遊び機会の創造が急務であることを再認識することとなる。当該シンポジウム登壇者の一人であり、小学校教諭の平松氏は、上述した2名のシンポジストからの発言を受け、「私自身がレクリエーション・インストラクター資格を有していることもあり、学校ではさまざまな場面でレクリエーションを導入しています。朝の会、帰りに会でのソングをはじめ、休み時間のゲーム、ときには体育の時間にグループづくりのためのダンスやゲームもやります。レクリエーション＝遊びなのかわかりません。しかし、レクリエーションに含まれている遊び要素が子どもたちの心を惹きつけてやまないのだと感じています。このごろは他の先生方にも『スキル』を伝授しているところですよ」と呼応した。

平松氏の言う「レクリエーションに含まれている遊び要素が子どもたちの心を惹きつける」のコメントは、今日の子どもたちを取りまく各種問題点の解決に向けた視座を提示していよう。すなわち、「人と人、人と社会をつなぐ」レクリエーション<sup>1)</sup>は、子どもたちのコミュニケーション能力をはじめとした各種学習能力を高めることに貢献できる可能性を有しているのである。

そこで本研究では、以上の学会大会の議論を踏まえつつ、子どもたちの学校生活場面において、レクリエーション活動がもたらす効果を実証的に検討することを目的とした。なかでも、レクリエーション活動に伴う子どもたちのコミュニケーション能力の変容に着目し、“学校レクリエーション”活動(以下、レク活動)の今日的な意味と可能性について言及してみたい。

## 2. 研究方法

### 1) コミュニケーション能力測定尺度の作成手続き

本研究にて用いた児童のコミュニケーション能力測定尺度は、以下の手続きをもとに、筆者ら独自で作成した。すなわち、①子ども期のコミュニケーション能力に関連すると思われる先行研究<sup>2)3)</sup>を収集し、②学校および家庭において、適切な仲間関係を形成し、維持するために必要とされる行動スキル要素(項目内容)を選定した、③抽出された計 50 項目に及ぶ仮尺度をもとに、小学 4 年生 250 名に対する質問紙調査を実施した(予備調査)、④回収された質問紙データを因子分析(主因子法、バリマックス回転)により解析したところ、固有値 1.0 以上の 4 因子(37 項目)を抽出した。因子の解釈と命名については、因子負荷量 0.50 未満の項目や 2 つ以上の因子で 0.50 以上の因子負荷量を有する項目を除外した。なお、抽出された 4 因子の累積寄与率は 52.9%であった。

抽出された 4 因子は、第 1 因子「規範維持スキル」(12 項目)、第 2 因子「積極的主張・行動スキル」(12 項目)、第 3 因子「共感的行動スキル」(10 項目)、第 4 因子「礼儀・質問スキル」(3 項目)と解釈・命名した。

本研究では、上述した 4 因子 37 項目を「小学生版コミュニケーション能力測定尺度」として用い、事業実施前後の数値変化をもとに各種検討を施した。なお、各質問項目の回答カテゴリーは、「5 いつもそうだ」から「1 ぜんぜんそうでない」(5 件法)とした。

## 2) 調査対象者ならびに実施方法・時期

調査対象者としては、O 市内 4 小学校の 4 年生(計 175 名)とした。4 校の選定にあたっては、現状において、いわゆるレク活動が実践されていない学校を抽出した後、各学校長への趣旨説明を実施し、協力を得るに至った。

4 校におけるレク活動は、昼休み時間帯に実施され、1 回あたり 30 分程度を要した。また、レク活動頻度の違いが子どものコミュニケーション能力の獲得にいかなる差異を生じさせることになるのかを検討する目的から、学校ごとの活動頻度の違いを設定した。

各学校におけるレク活動の支援・指導は、主に O 大学学生<sup>註 2)</sup>により実施された。活動内容は概ね以下に集約できる。すなわち、アイスブレイキングゲーム、ジェスチャーゲーム、キャッチザスティック(ゲーム・スポーツ)、レクダンス、等である。なお、本調査活動の実施時期は、2011 年 11 月から 2012 年 1 月の 3 ヶ月間である。

## 3) 調査および分析方法

レク活動による子どものコミュニケーション能力への影響を測定する目的から、上述したコミュニケーション能力測定項目を含んだ質問紙調査を活動前後に実施した(11 月期と 1 月期)。回収した数量データの分析処理にあたっては、PASWstatistics18 を用いて行われた。

# 3. 結果と考察

## 1) コミュニケーション能力の推移

表 1. コミュニケーション能力尺度得点の推移(因子毎の平均値、事前事後)

活動種	全体(n=175)			男子(n=86)			女子(n=89)		
	pre	post	有意差	pre	post	有意差	pre	post	有意差
実施なし(D校 n=35)	3.90	3.92	n.s.	3.59	3.56	n.s.	4.07	4.13	n.s.
週1回活動(A校 n=71)	3.91	3.94	n.s.	3.66	3.73	n.s.	4.09	4.12	n.s.
週3回活動(B校 n=34)	3.92	4.18	**	3.63	3.94	**	4.20	4.44	**
週5回活動(C校 n=35)	3.88	4.47	***	3.88	4.47	***	4.00	4.63	***

\*\*-p<.01, \*\*\*-p<.001

表 1 は、質問紙中で訊ねたコミュニケーション能力測定に関する全 37 項目の合計平均値を算出し、レク活動量の異なる学校ごとにレク活動前後間の有意差検定(t検定)を施した結果である。

レク活動前後で有意な数値差を確認した活動種としては、「週3回活動」校と「週5回活動」校の全体ならびに男女であった(p<.01,P<.001)。

つぎに、レク活動量の異なる各調査対象校における全体、男女別のコミュニケーション能力の向上率を検討してみた(図1)。向上率の算出にあたっては、[(実施後の数値-実施前の数値)÷実施前の数値×100]なる計算式を用いた。

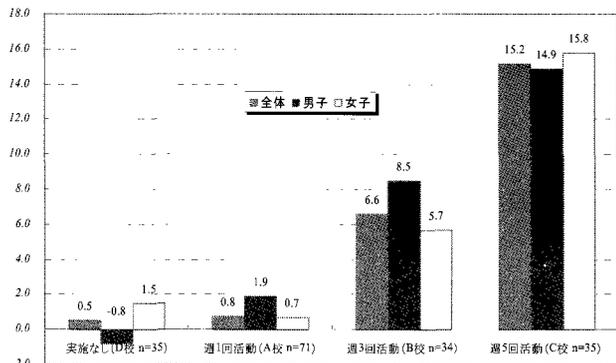


図1. コミュニケーション能力の向上率(%、活動量別)

## 2) 因子別にみたコミュニケーション能力の向上率

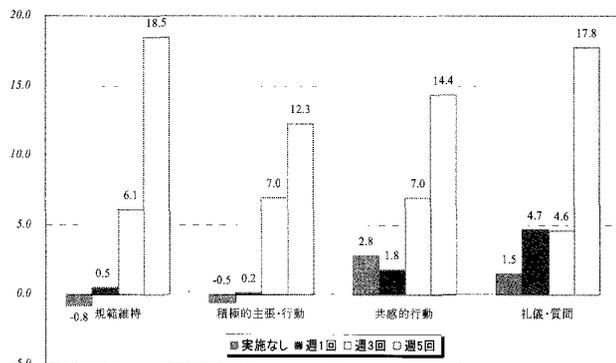


図2. 因子毎の向上率(%、活動量別)

いずれの因子ともに高い向上率となった学校種は「週5回活動」校であり、なかでも“ゲームなどで興奮しても相手に悪口を言わない”、“友だちに攻撃的な態度をとらない”といった、集団の中でのルール順守、約束事の遂行を意味する「規範維持スキル」の向上率が最も高くなり(18.5%)、「礼儀・質問スキル」(17.8%)、「共感的行動スキル」(14.4%)、「積極的主張・行動スキル」(12.3%)の順となった。また、「週3回活動」校においても、「週5回活動」には及ばないものの、「規範維持スキル」(6.1%)、「積極的主張・行動スキル」(7.0%)、「共感的行動スキル」(7.0%)と「週1回活動」校と比較して高い向上率となった。

「週5回活動」校において、顕著な向上率をみた「規範維持」「礼儀・質問」の両スキルに関しては、以下のような児童の自由記述内容と関連性を見出せそうである。すなわち、『最初のうちは、大学生が教えてくれるレクを楽しくやっていたらいいと思っていたけど、途中からはうまくできない人とか仲間に入れなくて(数集まりゲーム等)人にやさしくしてあげなくてはいけないと思うようになった』(男子児童、括弧内は筆者)、「人間知恵の輪とか、キャッチザスティックをやるときは、まわりの人たちの言うことを聞いて、みんなで決めないとうまくいかないと思った。大学生からみんなで考えてごらんと言われて、(レク活動時間以外にも)友だちと話し合うことが増えた」(女子児童)、「大学生のひとたちがいっば

いあいさつしてくれるのがうれしかった。だから私たちからもあいさつしようと思った。まちで偶然大学生に会ったとき、私のことを憶えてくれていてとてもうれしかった」(女子児童)などの記述内容は、集団内活動における「規範維持」や人間関係のなかでの「礼儀・質問」といった能力(スキル)獲得に関係するものであるといえよう。

換言すれば、週 3 回以上のレク活動量を経験した児童たちの多くは、大学生との頻繁な接触機会によって、新しい人間関係性を形成することとなり、そのことから自らの中でのコミュニケーション能力を向上させることにつながった、と解釈すべきなのであろう。このようなコミュニケーション能力の向上は、児童だけに生じたものではなく、むしろ支援・指導者側の大学生においても惹起されている可能性が高い。事実、大学生からは子どもたちの新しい関係性をもとにした自らの変化—特にコミュニケーションの新たな方法等—に関する発言が多数述べられていた。

#### 4. まとめと今後の課題

以上の結果から、小学校におけるレク活動の導入は、児童のコミュニケーション能力の向上に貢献する可能性が高く、その際の活動頻度としては、「週 3 回程度」(一回あたり 30 分程度)が一応の目安になりうるといえそうである。また、レク活動の内容については、主に人間関係の構築を意図したゲームプログラムが有効である可能性が示唆された。

しかしながら、本研究継続上の課題は数多く存在する。まず、本研究で用いたコミュニケーション能力測定尺度は筆者らが探索的に作成したものであり、今後、本尺度の妥当性を高める取り組みが不可欠である。また、「学校レクリエーション」の本格的な展開を考える際、「誰が」支援・指導者になりうるのかが問題となる。本研究においては、大学生による支援・指導が為されたものの、実際の学校でのレク活動実践を展開する場合には、教員の関与が不可欠となる。その点については、各学校で実施した座談会で以下のような発言(教員)を多数得ている。「子どもたちがこんなに喜び、なおかつコミュニケーション能力を高められるのであれば、私たち教員もぜひレクの勉強をしたいと思う。でも、どこで勉強できるのかわからない」。このような発言内容に鑑みたとき、地域レク協会ならびに課程認定校は、学校へのアプローチをより積極的に検討すべき時期を迎えているのではなかろうか。

【付記】本研究は、公益財団法人日本レクリエーション協会助成研究(平成 23 年度)である。

#### 註

- 1) 当該学会大会は九州保健福祉大学(宮崎県延岡市)で開催された。シンポジウムの構成員は、シンポジストとして、安原青児氏(九州保健福祉大学)、瀧信子氏(福岡こども短期大学)、平松良恵氏(福岡市立小学校教諭)、片山昭義氏(財団法人日本レクリエーション協会)の 4 名であり、筆者は、当該学会理事長としてシンポジウムを立案した。
- 2) O 大学は、レクリエーション・インストラクター資格の課程認定を受けている。今回のレク活動の支援・指導に関与した学生は 3、4 年生計 16 名である。

#### 文献

- 1) 財団法人日本レクリエーション協会編, レクリエーション支援の基礎—楽しさ・心地よさを活かす理論と技術—, 財団法人日本レクリエーション協会 : p2-31, 2007
- 2) 神野賢治・谷口勇一・吉田実央, レクリエーション支援者養成に関する実証的研究—対人関係スキル獲得の“気づき”とその場面, 自由時間研究(33), pp.21-33, 2008
- 3) 杉山佳生・渋谷崇行・西田保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久, 体育授業における心理社会的スキルを測定する尺度の作成, 健康科学 32, pp.77-84, 2010